民家「ソールカッテン」はずっと前に取り壊されてなくなったが、1912 年のオリンピックの100周年記念の年、ソッレントゥーナ・セントラムに「消えた日本人」について書かれた記念碑が設置された。2018年の夏、日本のテレビ会社 NHK はドキュメンタリーシリーズ「いだてん」の一つの放送回をストックホルム・スタディオンで撮影した。そこでは1912 年のオリンピックに日本が参加したことと、マラソンランナーの金栗四三のことがテーマである。なお、金栗四三を演じたのは日本で活躍している俳優の中村勘九郎である。

SCIF を訪れた俳優、中村勘九郎中村は、16の言語で印刷されたオリンピックの公式ポスターのうちの日本語版などを閲覧した。

スウェーデンが開催5回目のオリンピックの主催国として選ばれたのは、スウェーデンスポーツ振興中央協会(SCIF)の働きによるものであった。この協会は1897年ストックホルムの王宮で設立された。現在でもSCIFは王室からの援助を受けている。協会設立の目的は、スウェーデンで盛んになってきたさまざまなスポーツをサポートすることであった。1901年から1926年までSCIFは「ノルディック・ゲームス」を開催した。それは冬のゲームであり、現在の冬季オリンピックの前身とみなされている。SCIFは1912年のオリンピック開催についての申請を行い、またその組織的な仕事を先導しただけではなく、オリンピックスタディアムの建設も行なった。「太陽の光り輝くオリンピック」と称されたこのオリンピックは、その後のオリンピックの発展に大きな意味を持った。

SCIF はスタディオンの時計塔の最上階に事務所があり、この歴史ある協会は今でもスウェーデンのスポーツをサポートしている。特に、歴史の保存に力を入れ、1908年以来毎年、年報を発行し続けており、それは伝統に満ちた一冊の本としてまとめられている。SCIFはスポーツに優れた若者をサポートし、スウェーデンのスポーツにおける優れた取り組みに対して表彰を行い、また、スウェーデン国内および国際的なスポーツの研究に対するサポートを行っている。SCIFはスポーツ界の歴史的な遺産、例えばスウェーデンにある多くのスポーツ博物館やスポーツクラブに対して、経済的な支援などを行いサポートしている

消えた日本人の物語 1912年ストックホルムオリンピック大会での出来事

1912 年 7 月 14 日、ストックホルム・スタディオンで行われたマラソン競技

68 名でスタートし、34名が完走、32名が途中棄権、1名が死亡(ポルトガル選手のフランシスコ・ラザロ)、そして1名が失踪(日本選手の金栗四三)。30度台の猛暑が原因で金栗はダウンし、途中棄権するに至ったが、それを誰にも伝えないままだった。金栗がそのマラソンをストックホルム・スタディオンで完走し終えるには、1967年3月20日までかかった。その時間は54年8ヶ月と5時間32分20,3秒であった。

そのようにして、「消えた日本人」の物語はエピローグを迎えた。プロローグは金栗がマラソン競技の折り返し地点あたりにいた時のことだった。かなりふらふらとした足取りでチェックポイントを気にせず通り過ぎ、トゥーレベリにある民家の庭へ倒れ込む。そこでペトリエ一家が彼を介抱した。ここで彼は元気の出るようなフルーツジュースを一杯飲ませてもらう。

金栗はそこで何時間にも及んで座り込んだままだったが、やがてコートとストックホルムに帰るための電車賃を借りた。何日か後にこの日本人ランナーはペトリエ一家のところに出向き、もてなしへのお礼として小さな箱を手渡す。このあり得ないような出会いを経て、ペトリエ一家と金栗家の間にできた友情は今日でも強い絆を保っている。ポルトガルの選手フランシスコ・ラザロにとっては、マラソン競技は悲劇で終わった。彼は日射病になり、病院でケアされたにも関わらず翌日亡くなった。

スウェーデン人のスポーツジャーナリスト、オスカル・セーデルルンドが1950年代に、自らの「太陽の光り輝くオリンピック」1912年についての思い出をコラムに書いた。その中で、彼はちょっとしたアクセントとして「消えた日本人」の物語についてふれた。その後の調べにより、編集者のセーデルルンドは1962年、このミステリーの答えも示すことができた。一家は、金栗が倒れ込んだのは確かに彼らの家の庭であったと認めたのである。このミステリアスな失踪は、そこから本当のハッピーエンディングに移っていく。金栗四三がその5年後にスウェーデンに招待されたのだ。スウェーデンに滞在していたときに彼はトゥーレベリのペトリエ一家に再会した。そしてストックホルム・スタディオンは金栗に自身のマラソンをついに完走させるチャンスを提供した。1912年の失踪について76歳のマラソンランナーはこう説明した。「私はベストな体調ではありませんでした。マラソンの途中で突然頭がクラクラしました。私は記憶を失い、気がついた時にはマラソンの経路から程ないところの庭にいました。一人の親切な男性とその家族が私に元気が出るようなフルーツジュースを一杯くれました。」